

Φ.И. チュツチェフ政治詩試訳(6)

大 矢 温

「Φ.И. チュツチェフ政治詩試訳(1)～(5)」に引き続き、六巻本の全集をテキストにしてチュツチェフの政治思想を解明する手がかりとなりそうな詩作の翻訳を試みる。

1) 二つの声¹⁾

1

奮い立て、おお友よ、戦え、一心に、
戦が^{いくさ}多勢に無勢でも、闘争に勝ち目無くとも！
諸君の頭上には天高く星が沈黙する、
諸君の足下には、墓が——それもまた沈黙する。

いと高きオリュンポスにて神々をして悦に入らしめよ：
彼らの不朽性は苦労や不安とは無縁だ；
苦労や不安はただ死せる心のためにのみある……
その心には勝利なし、その心には終末がある。

2

奮い立て、戦え、おお勇猛な友よ、
いかに戦が^{いくさ}激しくとも、闘争が執拗でも！
諸君の頭上には無言の星の環がある、
諸君の足下には、聾啞の棺がある。

オリュンポスの住人をして羨望の瞳で
不屈の心の戦^{いくさ}を見せしめよ。
闘いながら、倒れ、運命にのみ敗れた、人は、
彼らの手から勝利の冠をもぎ取った。

1850年に書かれたが、ブロークをはじめとする象徴派詩人によって二十世紀初頭に評価され、とくにブロークの『バラと十字架』に大きな影響を与えたとされる²⁾。

「二つの声」として、構成上も二つの部分から成り立っているが、「二つの声は別々ながらひとつのことを言っている」とするロートマンの解釈は説得力がある³⁾。

神ならぬ、死を運命づけられた人間が、「多勢に無勢」で「勝ち目無い」戦いをし、「倒れ」敗れるが、チュッチェフはこの敗れた人間を「彼らの手から勝利の冠をもぎ取った」として、不死の神々の上に置く。オリュンポスの神々に言及しながら、有限の生に意義を見るこの詩に非キリスト教的要素を見ることは難しくはない。

2) 無題⁴⁾

見よ、川面の広がり、
新たに蘇生した水の流れに沿って、
全てを包括する海へと
氷塊が相續いて流れ行く様を。

太陽にであらうか、虹色に輝きながら、
あるいは夜更けの闇の中で、
いずれにしろ、全ては不可避的に溶けながら、
それらはひとつの目標へと流れ行く。

全ては共に — 大も、小も、
以前の姿を失いつつ、
すべては — 元素のごとく、一様に —
宿命的な無底に合流する！……

おお、幻惑の我等の思想よ、
汝、人間私、
汝の意義はかくのごとくか？
汝の運命はかくのごとくか？

1851年春の作と考えられている⁵⁾。一見、川面に浮かぶ氷が溶けて行く情景を叙述した詩のように見えるが、第四聯目でこの「氷塊」とは「人間」の比喩であることが分かる。上述の「無題」と同様に「人間の有限性」がテーマである⁶⁾。それと同時に、この詩においてチュツチェフは、流れ行く氷塊が「以前の姿を失いつつ」、「宿命的な無底に合流する」と詠っている点にも注目する必要がある。すでに分析の対象にした「日半ば⁷⁾」や「狂気⁸⁾」、そして「昼と夜⁹⁾」および「無題 (聖なる夜が……)¹⁰⁾」において、「無底」は全ての存在の根元的カオスであったが、この詩において「無底」は全ての存在がふたたび戻る終末の形状として描かれている。チュツチェフにおいて存在は無底から起こり、そして存在を止めた時には無底に戻るのである。

3) 我等が世紀¹¹⁾

我等が時代に、肉にあらず、精神が墮落した、
人は絶望的にふさぎ込む……
彼は夜の闇から光へと突破する
そして光を手にしながらも、不平を言い反乱する。

人は不信心によって焼け焦がされ、ひからびた
彼は今、耐え難きを耐えている……
そして彼は自らの死を認め、
そして信仰を渴望する —— が、それを求めない……

永遠に言わない、祈祷と涙とともに、
いかに悲しもうとも、閉ざされた扉の前で：
「我を入れ給え！—— 神よ、我は信じます！
我が不信心を救いに来給え！……」とは¹²⁾

手稿の日付から 1851 年 6 月の作とされている¹³⁾。1848 年以降ますます顕在化するヨーロッパの革命的風潮を背景としている。チュツチェフにとって革命は西ヨーロッパを支配する自我の精神、そして啓蒙の必然的な結末であった。

4) 無題¹⁴⁾

ほら、海から、そして海まで
鉄の糸が走る、
多くの栄光、多くの悲しみを
時々その糸は伝える。

それを目で追いながら、
旅人は見る、時に
予兆の鳥たちが留まるを
その知らせの糸に沿って。

ほら、草原から黒いカラスが
飛んできて、そこに留まった、

留まって鳴いた、そして
楽しげに羽ばたいた。

それは叫び、驚喜する、
そして糸の上を行き来する：
カラスが嗅ぎつけるのは血ではないか
セヴァストーポリの知らせの？……

手稿への書き込みから、1855年8月にモスクワから所領のオーフックへの途上、スモレンスク県のロスラヴリで書かれたとされている¹⁵⁾。チュツチェフはその二日前、ロスラヴリへの途上では「無題（この寒村よ）」を書いている¹⁶⁾。なお、チュツチェフの年代記の編者は、クリミアとペテルブルクを結ぶ電信線に沿ってチュツチェフはモスクワからスモレンスクまで400露里の旅を続けたと説明しているが¹⁷⁾、なぜスモレンスク経由で旅をしたのかは説明されていない。この詩からこの時期、チュツチェフがクリミア戦争の推移に大きな関心を寄せていたことが伺われる。

5) 無題¹⁸⁾

おお我が先見の魂よ！
おお、不安で満たされた、心臓よ、
おお、なんとお前は鼓動するのか
二つの世界の際にあるがごとく！……

お前は斯の如くかく — 二つの世界の住人、
お前の日は — 病的で熱狂的、
お前の夢は — 預言のように曖昧、
あたかも精霊たちのお告げのごとく……

苦難に満ちた胸を
宿命的な恐怖にかき乱させよ —
魂は、すがるつもりだ、マリアのごとく、
キリストの足に永久に。

上述の「無題(見よ、川の広がりの上に)」と同様に、人間の生の有限性がテーマになっている。知性を備えた人間は自らの人生の有限性を認識することができる。理性的であるが故に死の恐怖に直面するのだ。この恐怖から人を救うのは最早、啓蒙的な智ではなく、信仰である。

すでに述べたように、クリミア戦争を前にチュツチェフは一時スピリチズムに熱中していたので、この詩においてもスピリチズムの影響を見ることができる。

6) 無題¹⁹⁾

信仰と愛をもって、
その母なる大地に仕えた人に —
思想と血によって仕えた人に、
言葉と心によって仕えた人に、
そして — 故あることだが — 神意によって、
その労多き道中で、
新しい世代によって
頼りになる指導者と任じられた人に……

手稿への書き込みから 1856 年 1 月の作品と考えられている²⁰⁾。当時、文部大臣であったアヴラム・セルゲイヴィッチ・ノロフに捧げられたもの。一見、この詩においてチュツチェフはノロフを賞賛しているようだが、彼のノロフとの関係を考慮すると、そのような解釈は素朴すぎる事が分かる。

まずこの時期、1863年1月まで検閲行政は文部省と内務省が平行して管轄していたので²¹⁾、この詩が作られた当時、ノロフは文部大臣として各検閲委員会の上に立つ検閲行政の責任者であった。実際、検閲の責任者としてノロフはチュツチェフの「無題 (今お前は詩どころではない……)²²⁾」の雑誌掲載許可に直接、関与しているが、ノロフの決定はチュツチェフに好意的なものではなかった²³⁾。

このような事情を考慮すると、この詩は、実際にはチュツチェフに好意的でないノロフを誉めあげることによって事態を有利に展開しようとするチュツチェフの「高等戦術」と考えられる。55年12月に「ブトゥルリーン委員会」が廃止されるなど²⁴⁾、検閲行政の緩和が進む中で、「新しい世代」への方針転換をノロフに促しているのである。

7) 無題²⁵⁾

彼のすばらしき日は西に消えた、
不死の空焼けで空半分をつつみ、
彼はその後、夜半の空の深みから、
彼自身、預言の星となりて我等を見る。

1857年4月の作と考えられている²⁶⁾。詩人で1852年4月7日に亡くなったヴァシーリー・アンドレイヴィッチ・ジュコーフスキーに捧げたもの。当時チュツチェフは編集委員会の一員として、彼の命日に向けて著作集を準備していた²⁷⁾。チュツチェフにとってジュコーフスキーは古くからの友人であるだけでなく、アレクサンドル二世の皇太子時代の家庭教師として、宮中への貴重な足がかりだった。

8) 無題²⁸⁾

彼は以前、穏和なコサックだった、

彼は今、野蛮な監督官だ；
フィリップの息子——とでもしておこう、
が、決してアレクサンドル大王ではない。

ペテルブルク学区監督官で61年の学生騒擾を鎮圧したグリゴリー・イヴァノヴィッチ・フィリップソンについて書いたもの。新任の監督官のフィリップソンによってペテルブルク大学は閉鎖され、投獄された学生も出た。その後彼は、鎮圧の責任を取って62年には辞職願いを出している。

三行目と四行目は、フィリップソンを「フィリップの息子」と読み替えて、それをアレクサンドル大王がマケドニア王フィリップ二世の息子だった故事にかけて、同じフィリップの息子でもアレクサンドル大王ほど偉大ではない、と揶揄しているものと思われる。また、このフィリップソンはアレクサンドル・ネフスキー勲章を1960年に叙勲しているので²⁹⁾、ここからの連想も働いている。

9) 聖山スヴァトウエ・ゴールイ³⁰⁾

静かに、柔らかく、ウクライナの上、
魅惑的な神秘となりて、
七月の夜が横たわっている——
かくも深く空は退き、
かくも高く星は光る、
そしてドネツ川は闇の中で輝く。

甘美なる安らぎの時よ！
音は、スヴァトゴルの
リチャ³¹⁾、聖詠は、沈黙している——
僧院の壁のもと、
月に照らされた、

奉神者³²⁾は安らかに眠る。

そして巨大で垂直な、
そのすばらしき白をまといて³³⁾、
ドネツ川の上に懸崖が立つ、
空に向けてその十字架を掲げつつ……
そして永年の番人のごとく、
奉神者の番をしている。

巷間に言う、その胎内に、
隠遁し、棺の中のごとくに、
奇跡のイノク僧³⁴⁾が住んでいたと、
何年もの厳しい修練の中で、
幾多の涙を彼は神の前で、
幾多の信仰を注いだことか！……

この詩は、1862年5月に娘アンナが北ドネツ川の巨大な凝灰岩の上に立つス
ヴャト・ウスペンスキー修道院を訪れた感想を詩に書いたものをチュツチェフ
が改作したもの。全部で30行の原作のうち、5行を残して全て書き換えられた
ため、チュツチェフの作品と見なされており、著作集にも所収されている³⁵⁾。な
お現在、スヴャト・ウスペンスキー修道院は2005年から大修道院に格上げされ
ている。

10) 無題³⁶⁾

恐ろしい悪夢が我等の上にのしかかった、
恐ろしい、醜悪な悪夢が：
かかとまで血に浸かり、我々は格闘している、死者と

復活者と、新たな埋葬のために。

その戦いはすでに八ヶ月目におよぶ、
英雄的興奮、裏切りと嘘、
そのうえ強盗が祈りの家に、
片手に十字架とナイフを持って。

世界中が、嘘によって酔ったように、
あらゆる種類の悪が、あらゆる巧妙な悪が！……
いや、かくも凶々しく神の真実を、
人の偽りが鬨いへと呼び招いたことはない！……

その盲人の共感の叫びが、
狂乱の戦いへの全世界的叫びが、
知性の墮落にして言葉の歪曲が——
すべて立ち上がり、すべてお前を脅かす、

嗚呼親族の地方よ！—— そのような義勇軍を
世界は創造の日から持ったことはない……
嗚呼ルーシよ、お前の意義は、偉大だろう！
遅しくあれ、立て、しっかりしろ、そして克服せよ！

チュッチェフによればスラヴ民族の一員であるポーランド人は、「虚偽の教育」、「虚偽の国民性」によってカトリックを信仰し、ロシアからの離反を指向している³⁷⁾。それゆえ、1831年のポーランド蜂起に際して書かれた「アガメムノン」では「ロシアの保全と平静」のための「血塗られた代償」として「致命的な一撃」が正当化されたのであった³⁸⁾。

一方この詩は、1863年のポーランド鎮圧に対するオーストリア、英国、フラ

ンスの介入に呼応して作られたとされる³⁹⁾。この詩においても、「嘘」「人の偽り」が「神の真実」たるスラヴの民族性を歪曲し、「親族の地方」たるポーランドを盲目的に西へと指向させ、西への「共感の叫び」を発せさせているのである。

チェコの民族主義者ハンカに捧げられた詩において、「盲人」たる「我々」にスラヴの民族性を自覚させ、「灯台」に「灯を」ともして導くハンカを高く評価するのもこの文脈である⁴⁰⁾。「光」によるロシアのポーランドとの和解の可能性については「ミツケーヴィッチへ」でも言及されている⁴¹⁾。チュツチェフにとってポーランドはあくまでスラヴの身内であり、この内輪の争いに介入する西欧列強は「祈りの家」に押し入る「強盗」に等しかった。

11) 名宛てへの返答⁴²⁾

友よ、あなたは自分を、ひどく混乱させています——

あなたの混乱はロシアとともに偉大です。

あなたが英国議会の一員にですと？

あなたは単に英国クラブの一員に過ぎません⁴³⁾……

1865年1月11日にモスクワ貴族議会在アレクサンドル二世に対してゼムスキー議会設立を誓願したことが契機になっている⁴⁴⁾。この一節からもチュツチェフの西欧的な議会制民主主義に対する批判的な態度が読みとれる。

12) 無題⁴⁵⁾

かくのごとく
如斯！彼の方は救われた——そうあらざるを得なかった！

喜びの感情がルーシ中に広まった……

が、祈祷の最中に、感謝の涙の間に、

脳裏から離れない考えが、心ならず、胸をさいなむ：

すべて、その我等に向けた発砲によって、すべてが侮辱された！
そしてその侮辱には終わりが無いかのごとくだ：
嗚呼！のしかかった、恥ずべき汚点がのしかかった
ロシア人民の全歴史に！

手稿に 1866 年 4 月 4 日の日付があることから、カラコーゾフによるアレクサンドル二世暗殺未遂事件に際して書かれたと考えるのが自然である⁴⁶⁾。チュツチェフにとって「ニヒリスト」による皇帝暗殺の企ては、「ロシア人民の全歴史に」「のしかかった」「恥ずべき汚点」であった。

13) 無題⁴⁷⁾

ロシアの上に広がった
不意に、脅威となりし
そのあだ名は、ピョートル四世、
正にアラクチャーエフ二世。

1866 年から第三部長官となったピョートル・アンドレイヴィッチ・シュヴァーロフ公爵に当てつけたエピグラム。「時代の要求を力づくで鎮圧し、時代の打ち勝ちがたい精神に反撃するという実現不能の希望」をいただいていた、と評されるシュヴァーロフは、あだ名で「アラクチャーエフ二世」とも呼ばれていた⁴⁸⁾。また彼は、アレクサンドル二世政府の改革一般、とくに「グラスノスチ」政策に反対し、強権的な反動主義者として「ピョートル四世」と呼ばれることもあった⁴⁹⁾。帝政支持者でポーランドの武力鎮圧をも容認するチュツチェフだが、シュヴァーロフ公爵の強権的な思想統制には批判的であったことが分かる。

14) 皇帝アレクサンドル二世に⁵⁰⁾

心優しきツァーリよ、福音書の心をお持ちのツァーリよ、

側近への聖なる愛をお持ちの

引見なさるといふ、神よ授けたまえ大国の

率直な感謝の賛歌を！

その愛によって何百ならず何千の人を、

包む御前よ、

愛の励ましによって今、御前は、

お包みくださる、哀れな私をも

何によっても自分を主張できず、

自らの受難以外にツァーリのご配慮への

理由を持たない私をも！……

その恵みのご配慮によって

御前は私のお世話をなさりたもうた

そして私の精神を励まし、安心させた……

おお、褒め称えられしツァーリよ、

それも、ツァーリとしてではなく、神の代官として、

神の、

選民の、天上の隷僕たちの

聖なる軍団にのみならず、

この地上に隠棲する存在の、

ひとつひとつの、孤独なうめき声にも耳を貸し

彼らの賛美の祈祷にも耳を傾ける神の代官として。

ツァーリよ、御前に何を我らは望むのか？

声高な勝利の式典だろうか？

そこから御前に大きな喜びはない！

我らは御前により善きものを望む、
それは正に：
聖なるご意志に召されたからには、
ここで、この苦界で、行動し、
御前がますます自覚なさらんことを、
御前が今あるままに、
善の誠実な友として……
これが御前の、正しく誠の姿、
これが我等にとっても最上の誇りと栄光！

1873年4月に死の床にあったチュツチェフをアレクサンドル二世が見舞いに訪れようとした。そのときチュツチェフは「ツァーリのお見舞いの後、死ぬことができなかつたらとても無礼だろう」と言って固辞したという⁵¹⁾。ニコライ二世への感謝を込めて作られた詩である。

チュツチェフの娘アンナとダリアはニコライ二世の皇后、マリア・アレクセイヴナ付きの女官であり、特にアンナは皇太子たちの養育官でもあった。アレクサンドル二世にとってもチュツチェフは「側近」であり、病気のチュツチェフを見舞おうという意向も不自然なものではなかった。

注

- 1) *Тютчев, Ф. И.* “Два голоса” // Полное собрание сочинений и письма в шести томах (далее “Тютчев”). М., 2003. Т. 2. С. 25.
- 2) См. Комментария // Там же. С. 362.
- 3) *Лотман, Ю. М.* “Анализ поэтического текста: Структура стиха” // О поэтах и поэзии. СПб., 1996. С. 173.
- 4) *Тютчев, Ф. И.* “*** (Смотри, как на речном просторе...)” // Тютчев. Т. 2. С. 34.

- 5) См. Комментария // Там же. С. 369.
- 6) Аксаков, И. С. Биография Федора Ивановича Тютчева. Репринтное воспроизведение издания 1886 года. М., 1997. С. 112.
- 7) 拙稿「Ф.И. Чyтчeф政治詩試訳(5)」、札幌大学外国語学部『文化と言語』、2007年、第67号、90頁参照。
- 8) 同上、93-94頁参照。
- 9) 同上、102-103頁参照。
- 10) 同上、105頁参照。
- 11) Тютчев, Ф. И. “Наш век” // Тютчев. Т. 2. С. 40.
- 12) 「不信仰の時代」をなげくイエスと、半信半疑でイエスに息子の悪霊払いを頼む父親がイエスに問いただされて「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」と叫ぶ様子が新約聖書にある。マルコによる福音書 9.19-24。
- 13) См. Комментария // Тютчев. Т. 2. С. 375.
- 14) Тютчев, Ф. И. “*** (Вот от моря до моря...)” // Там же. С. 72.
- 15) См. Комментария // Там же. С. 423.
- 16) 大矢他、「Ф. И. Чyтчeф政治詩試訳(3)」、札幌大学外国語学部『文化と言語』、2006年、第65号、201頁参照。
- 17) Динесман, Т. Г. и др. Летопись жизни и творчества Ф. И. Тютчева. Музей-усадьба “Мураново”, 2003. Кн. 2. С. 237.
- 18) Тютчев, Ф. И. “*** (О вещая душа моя...)” // Тютчев. Т. 2. С. 75.
- 19) Он же. “*** (Тому, кто с верой и любовью...)” // Там же. С. 77.
- 20) См. Комментария // Там же. С. 427.
- 21) 拙稿「ゲルツェンの自由印刷所計画と政府の検閲政策」、『ロシア史研究』、1995年、第56号、24頁参照。
- 22) 大矢他、「政治詩試訳(3)」、197-198頁参照。
- 23) 1854年12月30日にモスクワ検閲委員会はЧyтчeфの詩「無題（今お前は詩どころではない……）」の雑誌『モスクワっ子』への掲載許可についてノロフに上申している。ノロフはこれを検閲総局にまわし、判断を諮問

する。55年1月22日付で検閲総局は印刷許可の決定をするが、3月17日にノロフはモスクワ検閲委員会の上申に「答えない」事を決定。結局、『モスクワっ子』にチュツチェフの詩は掲載されなかった。検閲委員会、検閲総局による印刷許可の決定にもかかわらず、ノロフがそれをもみ消したことになる。См. Летопись... Кн. 2. С. 222-223, 226.

- 24) *Лемке, М. К.* Очерки по истории русской цензуры и журналистики XIX столетия. СПб., 1904. С. 203-204.
- 25) *Тютчев, Ф. И.* “****(Прекрасный день его...)” // Тютчев. Т. 2. С. 82.
- 26) См. Комментария // Там же. С. 432.
- 27) См. Письмо Д. Ф. Тютчевой от 13 апреля 1857 г. // Литературное наследство. М., 1989. Т. 97. Кн. 2. С. 288.
- 28) *Тютчев, Ф. И.* “****(Он прежде мирный был казак...)” // Тютчев. Т. 2. С. 114.
- 29) См. “Филипсон, Григорий Иванович” // Русский биографический словарь. СПб., 1901. Фабер-Цявловский. С. 126.
- 30) *Тютчев, Ф. И.* “Святые горы” // Тютчев. Т. 2. С. 119.
- 31) 原文は лития「熱裏公禱」と訳される。聖堂の中で行う聖事祈祷のこと。
- 32) 原文は богомольцы、ロシアの民のことと解される。
- 33) 修道院自体がドネツ川岸の巨大な凝灰岩の上に立っている。
- 34) 原文は инок、洞窟の中で昼夜祈祷する修行僧。
- 35) См. Комментария // Тютчев. Т. 2. С. 477-479.
- 36) *Тютчев, Ф. И.* “****(Ужасный сон отяготел...)” // Тютчев. Т. 2. С. 121.
- 37) *Он же.* “Letter à M. le Docteur Gustav Kolb, rédacteur de la «Gazette Universelle» (Россия и Германия)” // Тютчев. Т. 3. С. 17.
- 38) 大矢他、「Ф.И. チュツチェフ政治詩試訳(2)」、札幌大学外国語学部『文化と言語』、2006年、第64号、95-96頁参照。
- 39) См. Комментария // Тютчев. Т. 2. С. 480.

- 40) 大矢他、「政治詩試訳(2)」、99 頁参照。
- 41) 同上、103 頁参照。
- 42) *Тютчев, Ф. И.* “Ответ на адрес” // Тютчев. Т. 2. С. 136.
- 43) モスクワの英国クラブの建物は現代史博物館として現存している。Москва, Тверская улица, дом 21.
- 44) См. *Никитенко, А. В.* Дневник. Ленинград, 1955. Т. 2. С. 509.
- 45) *Тютчев, Ф. И.* “*** (Так! Он спасен...)” // Тютчев. Т. 2. С. 155.
- 46) См. Комментария // Тютчев. Т. 2. С. 520.
- 47) *Тютчев, Ф. И.* “*** (Над Россией распростертой...)” // Тютчев. Т. 2. С. 180.
- 48) См. *Долгоруков, П. В.* Петербургские очерки. М., 1992. С. 287.
- 49) Там же. С. 308.
- 50) *Тютчев, Ф. И.* “Императору Александру II” // Тютчев. Т. 2. С. 257.
- 51) См. Комментария // Тютчев. Т. 2. С. 614.